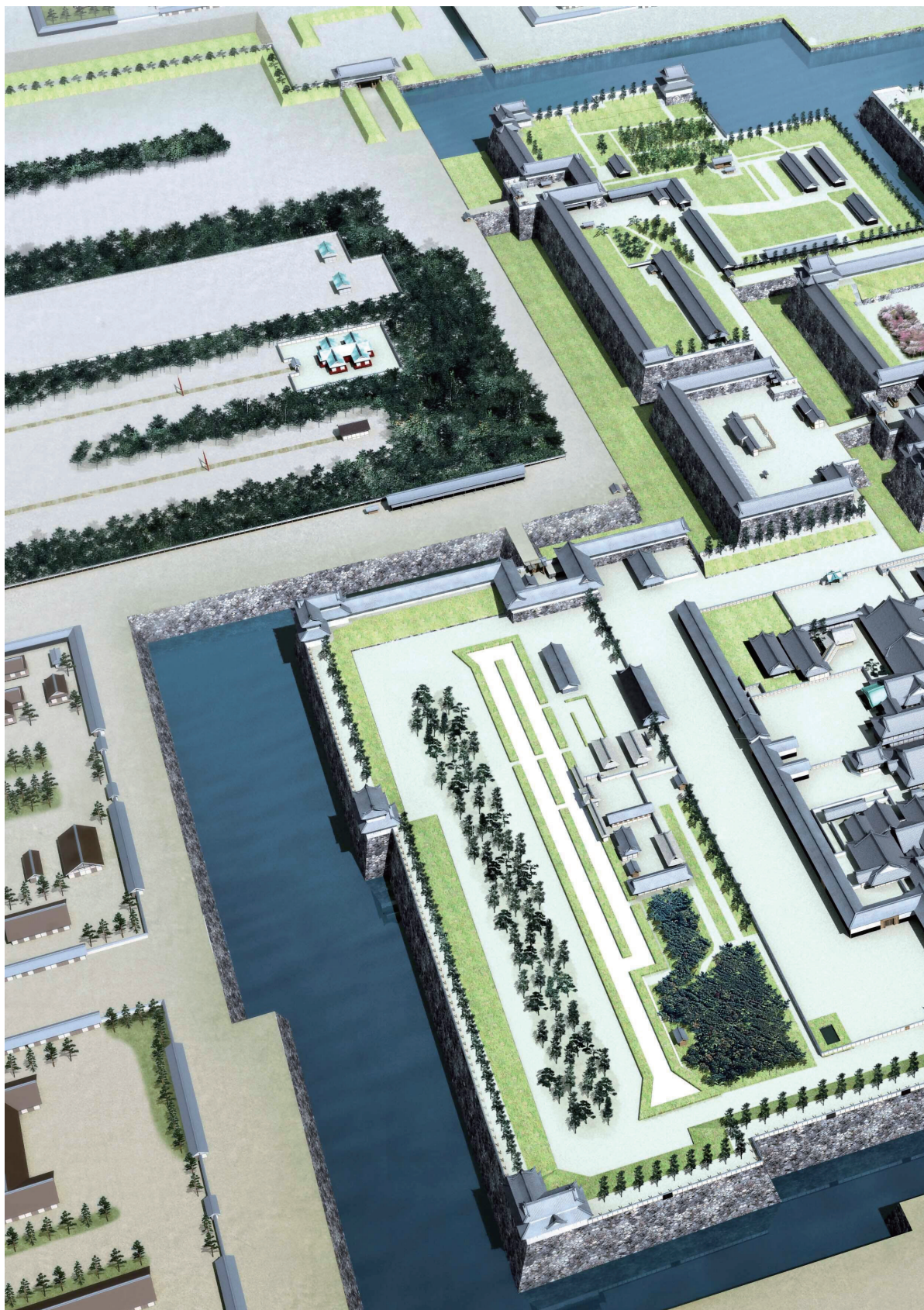






口絵1 名古屋城中心部鳥瞰復元CG（復元設計：三浦正幸、制作：株式会社エス、19世紀中葉の様子）

類例なき特別な二の丸をもった名古屋城

広島大学名誉教授 三浦 正幸

はじめに

本報告は、二〇二四年十一月十日に開催された「名古屋城調査研究センターシンポジウム4 十七世紀の名古屋城―二之丸のすがたをさぐる―」において、筆者が「類例なき特別な二の丸をもった名古屋城」と題して口頭発表した内容を基にして新たに書き起こしたものである。

一 名古屋築城時の社会的背景

(一) 慶長十五年（一六一〇）における西国外様大名の情勢

周知のことではあるが、慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原の戦いで東軍すなわち徳川家康に与した大名衆（後に外様大名と呼ばれる者）に対しての論功行賞の結果、京都以西の近畿地方および中国地方・四国地方・九州地方、大雑把にいう西国の地（換言すれば西日本）は、豊臣系を中心とする外様大名衆が領有する地域となった。

その中には関ヶ原以前からその地を領有していた島津（鹿児島城、以下の居城名については参考として挙げたもので、必ずしも同時代のものではない）・鍋島（佐賀城）・毛利（萩城）などのいわば土着大名もいたが、その地域で加増または所領安堵された加藤清正（熊本城）・黒田（福岡城）・加藤嘉明（伊予松山城）・藤堂（今治城）・生駒（高松城）・蜂須賀（徳島城）などいわば豊臣系大名が多くおり、さらに近畿や東国の地から西国へ大加増・転封した細川忠興（小倉城）・田中吉政（柳川城）・

山内一豊（高知城）・福島正則（広島城）・堀尾吉晴（松江城）・小早川秀秋（岡山城）・中村一忠（米子城）・池田輝政（姫路城）・浅野幸長（和歌山城）といった豊臣系の有力外様大名がひしめいた。

島津氏を除いて彼らは、関ヶ原の翌年頃から大々的に城普請を始め、高い石垣や天守を備えた新式の城郭を完成させていった。なお、小早川秀秋の無嗣断絶によって遺領の岡山城は池田忠継、津山城が森忠政によって普請されていた。もちろん有力大名以外でも西国の外様大名衆はこぞって城普請（唐津城・府内城・臼杵城・日出城・佐伯城・延岡城・岩国城・津和野城・岸和田城など）を始めた。こうした関ヶ原以降、慶長二十年（一六一五）の豊臣氏滅亡まで続いた城普請の活況は、慶長の築城盛況期と呼ばれている。

慶長十五年の名古屋城の着工は、西国の外様大名衆を中心とした築城盛況期の終盤に位置することに改めて注意しておかねばならない。すなわち西国の大規模城郭の多くがすでに完成を迎えた時期であった。

(二) 家康による公儀普請

その当時には西国の地においては、幕府領や譜代大名の領地はまだほとんどなく、めばしい城は幕府領の備中松山城しかなかった。したがって、西国の豊臣系外様大名および徳川政権に強い反感をもっていたであろう島津・毛利などの有力大名が結束して倒幕に立ち上がったとしたら、西国大名のほば総てを敵に回すことになる。それでは幕府に勝算がないのは、誰が考えても明らかである。そこで倒幕の旗頭となる豊臣秀頼の大坂城を囲むように幕府方の城を築く、いわゆる大坂城包囲網が家康による公儀普請で次々と実施された。

それは加納城（岐阜県）・彦根城から始まり、西国外様大名を動員し

て慶長十四年（一六〇九）に丹波篠山城（兵庫県）・同十五年に丹波亀山城（京都府）が築かれた。また慶長十二年に徳川本城の江戸城、同十三年に家康の隠居城として駿府城も名古屋城築城の直前に公儀普請によって整備拡張された。

慶長十五年に着工された名古屋城も大坂城包囲網の一環であったと歴史系の種々の商業雑誌において喧伝されている。しかし、丹波篠山城や丹波亀山城と同等の大坂城包囲網の形成という築城目的だけでは、名古屋城の規模の大きさ、石垣や天守をはじめとする城郭建築の破格の壮大さ、そして特別な二之丸（これ以後、二の丸の表記については、名古屋城の二の丸は慣例に基づいて「二之丸」と表記し、その他の一般的なものについては「二の丸」とする）の縄張を理解するには不十分だと考えられるのである。

次に徳川本城の江戸城以外の代表的な公儀普請の城郭の規模（堀を含む城内面積）を上げておく。なお、この規模は慶長十五年頃当時のもので、豊臣氏が減んだ元和以後に拡張された部分は含まない。

・名古屋城	一一六五	千平方メートル
・丹波篠山城	一九五	
・丹波亀山城	三六二	
・彦根城	二二三	（内堀以内の面積、中堀・外堀は後の拡張）
・加納城	一五一	
・駿府城	四九〇	

これを見ても名古屋城がいかに破格的な規模であったかが理解されよう。

二 幕府系の輪郭式縄張

（一）近世城郭の縄張の分類

近世城郭の縄張の分類は、昭和戦前に大類伸博士^①が提案したものによる。当初は輪郭式・輪郭式変態・梯郭式・梯郭式変態・連郭式の五種類であったが、その基本形式は輪郭式・梯郭式・連郭式の三種類であって、この三種類が縄張分類として今日一般的に使われている。もちろん、この分類は築城時において縄張の理念とされたものでは決してなく、残された城跡の縄張を現代人が便宜的に理解するための一応の目安であって、総ての城の縄張をこれによって完全にあるいは容易に分類できるものではない。もちろん分類不能の例もある。ある意味、名古屋城の縄張はそれに類する。

輪郭式とは、本丸の四周を二の丸が取り囲むもので、さらに三の丸が取り囲む嚴重な例もある。駿府城（静岡市）が嚴重な典型例で、本丸を

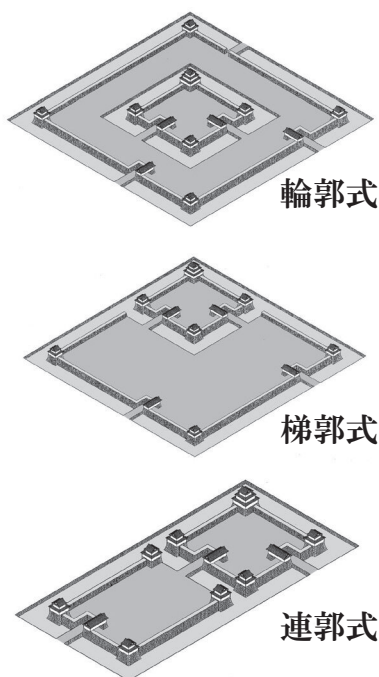


図1 城郭の縄張模式図

二の丸・三の丸が次々に取り囲んでいた。明治期に本丸が取り壊されたので、現状では二の丸を三の丸が取り囲んでいる。輪郭式の例には丹波篠山城・大坂城・二条城・山形城・米沢城などがある。

輪郭式では、外側の曲輪の堀の延長が長大になってしまうので、土木工事が膨大になる。しかし、その割には二の丸の奥行きを短くしか取れないため、役所や屋敷を設けるのに不都合であって、実用性は低かった。したがって、縄張としては費用対効果が著しく不適切な形式であって、実例は少ない。また、輪郭式は最も嚴重そうに優れているように見えるが、長大な二の丸の城壁のどこか一か所からでも敵の侵入を許すと、二の丸全体が陥落してしまうという、防備上で重大な欠陥もあった。

梯郭式は、本丸の周囲の二面から三面を二の丸が囲むもので、輪郭式の二の丸の一部を取り除いた形式である。順次に三の丸やその他の曲輪が本丸や二の丸に取り付くことが多い。本丸が剥きだしになってしまうが、その部位に天然の要害や水田が位置していれば防備上に問題はない。近世城郭で最も多く見られる縄張である。

連郭式は、本丸と二の丸を一行に並べた形式である。水戸城では、かつて台地上に六つの曲輪が一行に連なっており、連郭式の典型例である。ほかに高知城・明石城（兵庫県）・伏見城・盛岡城（岩手県）などがある。連郭式は三方が剥き出しの本丸を直接に攻められる虞があるので、一般的には連郭式の曲輪の周囲をさらに輪郭式や梯郭式に外側の曲輪が取り囲む。

（二）名古屋城の縄張の概要

城は立地によって、平城・平山城・山城の三種類に大別される。平城は平地に立地する城で、城内と城外の比高（標高差）があまりないもの

をいう。平山城は低い山や丘の上に中心部を置き、その周囲の平地も城内に含むものをいう。山城は高い山上に立地する城である。

名古屋城は平城に分類されている。南方や東方の城下町から望むと本丸までほとんど標高差がなく、完全な平城である。しかし、北方や西方から望むと、城は現状で比高約一〇メートルの台地（以前は洪積台地といった）の上にあって、やや低めの平山城としても大過はないであろう。大坂城や江戸城も同じような台地上の立地であって、特別に大きい城郭に共通して見られる特色である。名古屋城が築かれている台地は、北側と西側に太古に形成された河岸段丘（あるいは断層崖、以後、河岸段丘等という）で区切られており、その角部に本丸が位置している。

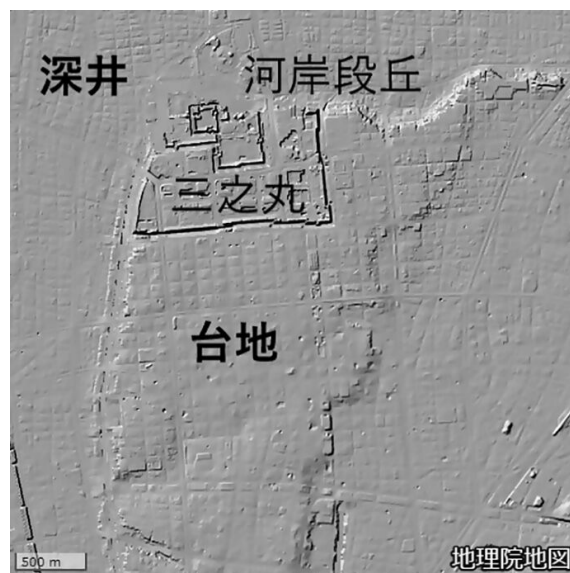


図2 名古屋城が築かれている地形
地理院地図（陰影起伏図、一部加工）

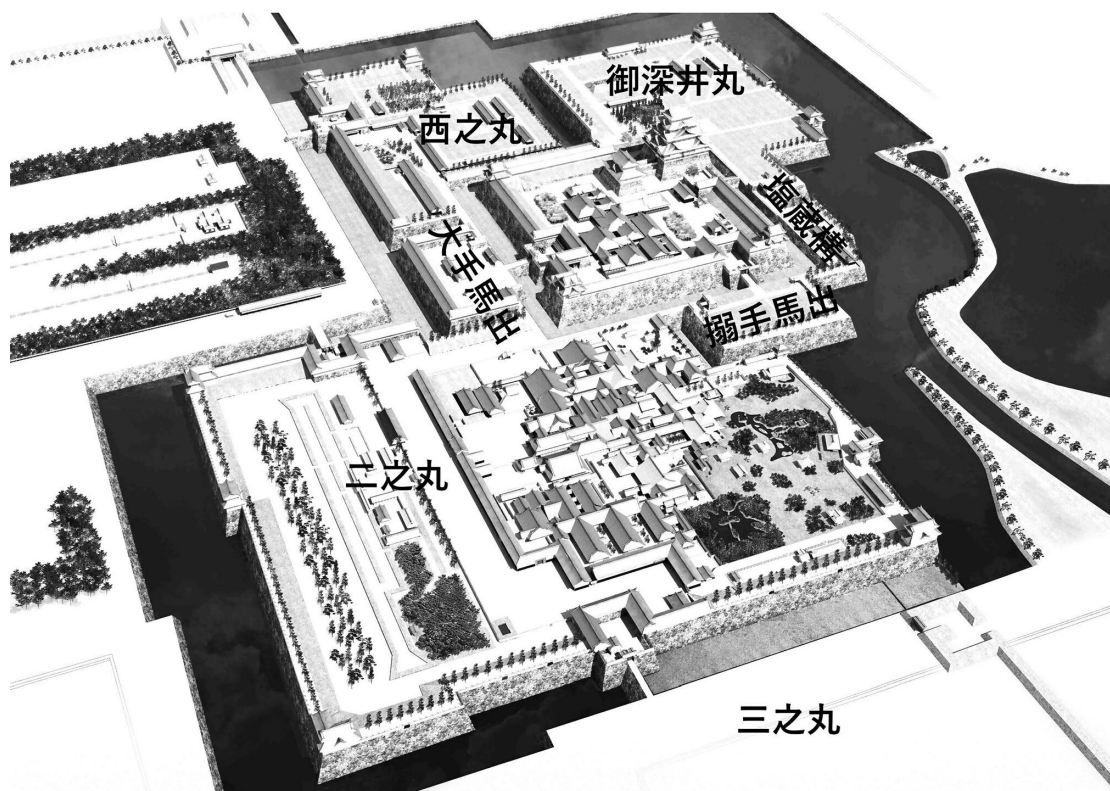


図3 名古屋城中心部の縄張（口絵1）
復元設計：三浦正幸 CG：株式会社エス

名古屋城は関ヶ原の戦い以降に着工された平城あるいは低い平山城であるので、堀と石垣あるいは土居は基本的に直角に屈曲する、新式の縄張である。ところが、本丸北東側の曲輪である塩蔵構の北東隅部だけは斜めに削ぎ落されている。さらに名古屋城の城壁の北面全体を見ると、塩蔵構の北東隅部の削ぎ落しを含めて、御深井丸北面から二之丸の北面へ向かって少しずつ雁行しながら城壁が南側へ後退している。また、三之丸の西面は西へ向けて円く迫り出す。このような縄張の独特な形状は、天然地形である河岸段丘等の方向が歪んでいたために生じたものである。

したがって、本報告が扱う二之丸は、河岸段丘等によって形成された台地上において、本丸の南東へ向けて、地形の制約を全く受けず、規模を無制限に自由に計画ができたと考えられる。その点において、特異的に大規模な二之丸は、名古屋城では現状の位置にしか築けなかったと言える。

そして、大坂城と同様に名古屋城では、敵が侵攻しやすい台地上に向けては厳重に隅櫓や多門櫓を建て、さらに三之丸を設けて防備を固めていた。それに対して、低地の方はフケ（深井）と呼ばれた湿地帯だったため敵の大軍が侵攻することは不可能だったので、櫓も少なく、曲輪も狭かった。

（三）名古屋城の縄張の戦略的意義

名古屋城の縄張は個性的であって、全国に類例はない。ほぼ正方形の本丸を台地の北西角近くに置き、その周囲に狭い内堀を廻らす。本丸の南西に西之丸、北西に御深井丸、北面東寄りに塩蔵構、東面北寄りに堀手馬出^②、南東に二之丸、南面東寄りに大手馬出を置き、それら六つの曲

輪で本丸の四周を取り巻く。それらの曲輪の外側を外堀で囲む。そして、それらの南面と東面は台地上に連なるので、さらに三之丸を設けて囲む。

このような名古屋城の曲輪の配置について、輪郭式・梯郭式・連郭式の三種類に強いて分類するならば梯郭式となろう。しかし、名古屋城の場合、それら三型式のどれにも分類されない独特な縄張であるとした方が分かりやすい。

六つの曲輪で本丸を取り巻いているので、六つの曲輪を一連のものとみなせば何とか輪郭式といえなくもない。輪郭式の防備の欠陥を補うため、本来は一連である二之丸を六つに仕切ってそれぞれ独立させ、万が一の敵の侵攻を局所的に抑えることに成功している。また、名古屋城の塩蔵構・搦手馬出・大手馬出は小さな曲輪で、二之丸は逆に広大である。ほかの五つの曲輪を合わせたほど二之丸を拡大にして、郭内の実用性を高めることにも成功している。防備と実用を兼ね備えた、全国一の巧みな縄張であって、従来の三型式に分類すべきものではなからう。なお、三之丸は梯郭式に取り付いている。

ここで、六つの独立性の高い曲輪で本丸を取り囲むという、史上で最も巧妙な縄張を名古屋城がもっていることに注目すべきである。さらに本丸の全周および西之丸と大手馬出の南正面、二之丸の西正面には石垣上に嚴重な多門櫓を廻らしていた。また、主要な五城門である、本丸表門・本丸東門、西之丸榎多門（現在の名古屋城正門の位置）、二之丸大手門（西鉄門）・二之丸東門（東鉄門）はすべて二重に城門を建てる枡形門にしていた。石垣上の多門櫓は当時の兵器や攻城法では絶対に打ち破れない究極の防衛線であり、枡形門は絶対に侵入できない究極の虎口だった。したがって、曲輪の形状が単純なものにもかかわらず、史上最堅

固な構造になっており、もはや豊臣大坂城など足元にも及ばない史上第一の縄張であった。

しかもこの単純な縄張は、石垣普請を二十家の外様大名衆に割り当てるには極めて好都合だった。各曲輪の周囲の石垣は、屈曲が少なくて直線的で画一的だったため、助役の大名の禄高に応じて機械的に丁場を割り振られた。城内各所で同時に石垣普請が進行しても、直線的な石垣なので、お互いに邪魔にならずに工事ができた。

そして、各大名の丁場を一か所ずつに限定するのではなく、多くの曲輪に散らばらせて担当させた点が注目される。それには、城壁の高さの差、水堀・空堀の別など、曲輪ごとに難易度が違う石垣工事を平等に分担させるという、表向きの理由がある。もう一つの理由は、その二十の外様大名衆に名古屋城の縄張全体の嚴重さを思い知らせる戦略であったと考えられる。大坂城攻めに際して徳川に反旗を翻す虞があった、仮想敵大名を集めての工事だからである。丁場の分散配置によって、参加した総ての大名衆に名古屋城全体の究極的な縄張を認知させ、大坂城に比べてはるかに強大な城郭であることを痛感させるのに成功したと言える。その究極な縄張には弱点が全くなく、縄張を仮想敵に公開しても問題ないばかりか、謀反に対する強力な抑止効果が期待できた。実際にその後起こった大坂冬の陣では、それらの大名衆は江戸に留め置かれた福島正則を除き豊臣秀頼に味方することなく、幕府軍として忠実に奮戦している。まさに名古屋城の築城は戦略そのものだったと言える。

名古屋城本丸周囲の内堀は、同時期の他城の内堀と比べて著しく幅が狭い。しかも防衛性能の劣る空堀である。一般的な城では、内堀が広く、外堀が狭く造られているが、名古屋城では全く逆である。内堀を狭く造

るのは、家康がかつて本拠とした岡崎城の本丸北側の空堀に準じている。堀幅が狭いので水堀にする必要がなく（空堀を広くすると敵が堀内に侵入しやすい）、空堀は高い石垣を築いた場合に安定性が良い。この狭い堀の幅は、速射能力が火縄銃の二、三十倍もある弓矢の矢掛かり（一般的に十五間、必殺必中の射程距離）になっている。本丸全周を囲む多門櫓や隅櫓からの弓矢の速射によって、本丸に押し寄せる敵の大軍を薙ぎ倒す家康流の縄張である。

それに対して、広い水堀と高い石垣からなる直線的な城壁を築き、その上に多門櫓を廻らし、虎口を枡形門として、敵の侵入を完璧に防ぐ防衛線を構築するのは、家康に信頼されて城の縄張を多く任された藤堂高虎の築城流儀である。

家康流の実戦的かつ攻撃的な縄張手法に、高虎流の絶対的な防御手法を融合させた、崇高な縄張といえよう。そうした点で、名古屋城の縄張は全国一と評価できるのである。

（四）巧妙な鵜の首

本丸を囲む六つの曲輪どうしは、幅の狭い土橋だけで接続している。それら六か所の土橋は総て本丸の内堀に沿って設けられている。現状では、西之丸と大手馬出を区画していた堀が明治後期に埋め立てられてしまい、その部位の土橋は地続きになっていて、ほかの五か所の土橋が残されている。

それらの土橋は幅が狭いので、敵の大軍が渡ろうとした場合には渋滞が起こり、それに対して本丸の隅櫓・多門櫓から弓矢あるいは鉄砲で横矢を掛けられる。土橋上は狭くて逃げ回れず、内堀は狭いので弓矢の有効射程距離の内に入っている。土橋によって区切られているため、六つ

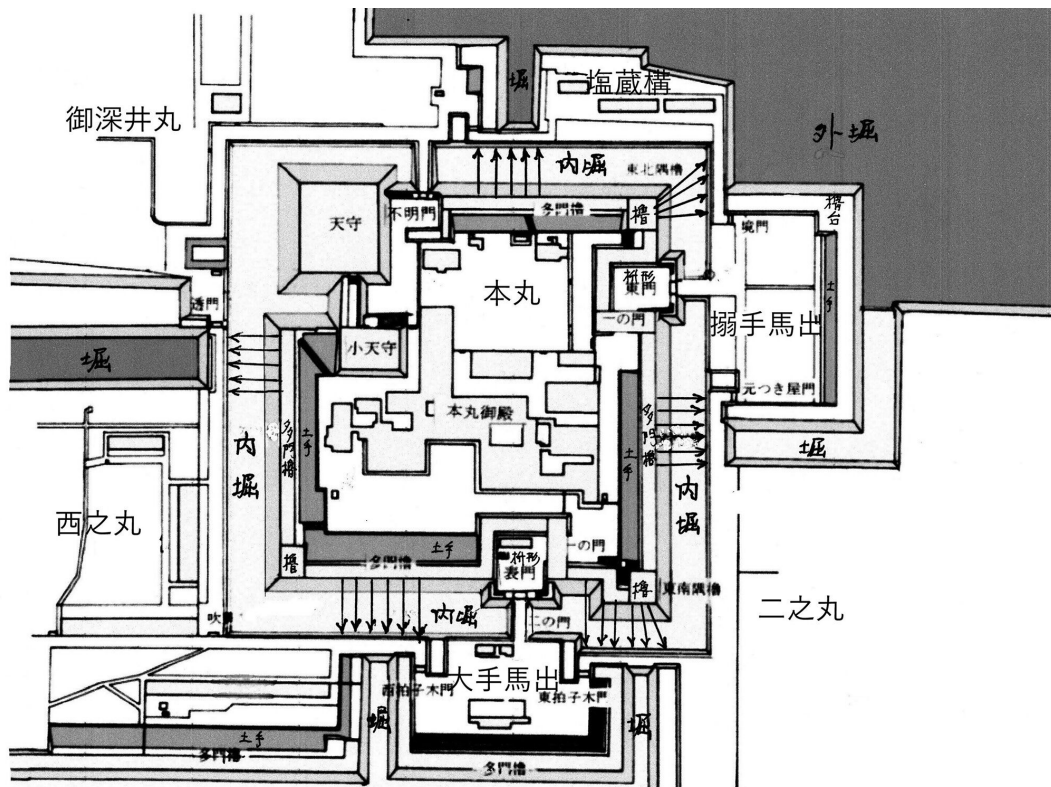


図4 名古屋城本丸周囲の鵜の首に対する横矢掛け

の曲輪のいずれか一つが敵の手に落ちたとしても、その隣の曲輪に敵が侵入するのを完全に防げた。その土橋の先には、かつて総て城門（埋門など）が設けられており、敵はその城門に遮られて土橋の上で停滞し、横矢がさらに有効になる。そして、西之丸と御深井丸間を除く五か所の城門では、敵が土橋を辛うじて渡って城門に対峙すると、本丸に背中が向くようになっていた。そこで、防ぎようのない横矢を受けることになる。

他城でも土橋に横矢を掛ける例は多々見られるが、それらは、名古屋城本丸の不明門や表門や東門に通じる土橋と同じ構造のものが一般的で、それは堀を渡る土橋に対する横矢である。名古屋城の六つの曲輪間にある土橋は、堀を渡る土橋ではなく、隣の曲輪に行き来する通路であって、土橋上には完全に横方向からの射撃が連続的に掛かる。名古屋城の六か所の土橋は、土橋の特殊な応用例で、しかも土橋を最も有効に防御に応用した例であって、史上随一の縄張である。

この縄張手法の古例は、慶長三年（一五九八）に家康の重臣だった井伊直政が築いた高崎城（群馬県）の西曲輪にかつて見られたものである（現存しない）。本丸の西にあった西曲輪は城外に直面していたので、敵の侵入の虞があった。そこで、城外から四か所の堀（天然の谷を含む）を貫入させて曲輪を分断し、その突き当たりに土橋を設け、そこに敵を通行させて本丸から横矢を掛けるものだった。

ところで、名古屋城では、塩蔵構と搦手馬出の間の土橋は別として、他の部位では、外堀から本丸に向かって直角に貫入してくる堀によって曲輪どうしを仕切り、内堀の間際でその仕切り堀を止めて、狭い土橋を残す構造である。五か所の仕切り堀（うち一か所は現状は埋没）がある。

高崎城の手法を高度化させたものである。

なお、この仕切り堀を鵜の首という場合と土橋を鵜の首という場合があつて混乱している。仕切り堀が細長いのでそれを鵜の首というよりも、土橋上で停滞して身動きできなくなった敵を鵜の首に詰まって身動きできない鮎に例えるなら、鵜の首は土橋の方である。

（五）名古屋城の縄張の原型

このような名古屋城の巧妙な縄張の原型は、駿府城（静岡市）である。駿府城は徳川家康の隠居城として、名古屋城に先んじて慶長十二年（一六〇七）に公儀普請で築かれた。残されている古絵図によると、二の丸の枳形を避けて本丸の南西隅が少し欠けているが、本丸はほぼ正方形であつて、その北西隅に天守を設けていた。本丸の南と東に枳形門を設け、北には天守脇に非常口の小門（名古屋城の不明門に相当）を開く。本丸は多門櫓で取り囲んでいた。南門と東門の外側は、二の丸を仕切り石垣（東門の南側は水路）で区画して一種の馬出を設けていた。

そうした駿府城の縄張は名古屋城と瓜二つで、駿府城をさらに拡大発展させたのが名古屋城の縄張であることには疑問の余地はない。

さらには、名古屋城の大小天守台に見られる嚴重な地階通路の構造も、その原型は駿府城に見られる。駿府城天守台³は巨大で、その巨大な天守台の中の平地に天守が建てられていた。天守の周囲は堤防状の石塁が囲み、南側に天守台入り口の小さな枳形が設けられており、そこに櫓門が建てられていたと考えられる。その枳形の南には小天守台が併設されており、本丸からは小天守台の北にある階段で上る。小天守台の地階でコの字形に通路を曲がり、天守台入り口の枳形に至った。

名古屋城では、駿府城の巨大な天守台を小型化し、天守台の中に建て

られていた天守を直接に天守台周縁部の石塁の上に建て、入り口の枡形は天守地階の枡形としている。江戸幕府の御大工頭だった中井家（名古屋城天守もその時の当主中井正清が担当）に伝わる慶長創業時の名古屋城の指図によって、名古屋城の大小天守の構成に二度の設計変更がなされたことが知られるが、結局採用されたのは、原型となった駿府城天守台の形式を小型化したものであった。

（六）桑名城・駿府城・丹波篠山城との比較

名古屋城の縄張は、前述したように、本丸全周を二の丸で取り巻く輪郭式縄張を基本にして、その二の丸において仕切り堀を外堀から貫入させて六つの曲輪に分割し、土橋で鵜の首を形成するものである。いわば輪郭式からの大々の進化発展型であって、もはや分類不可能な縄張形式とも言える。

ところで、名古屋築城に先行して幕府が行った公儀普請の駿府城や丹波篠山城は、典型的な輪郭式縄張である。それら二城では、城壁の長大さに比して狭小な二の丸が特徴的であって、輪郭式縄張の深刻な欠点を露呈していた。

しかし、長大な二の丸の城壁のいずれか一か所でも敵の侵入を許すと、二の丸全体が陥落してしまうという軍事的な欠点についてはすでに対処がしてあった。それは、名古屋城における鵜の首のような嚴重さではないが、二の丸を低い石垣と土堀で区画して分割していたことである。駿府城や丹波篠山城では、本丸虎口前に内堀を挟んで二の丸内に曲輪馬出を設けていた。惜しまれることにこの二城の曲輪馬出は全く現存しないが、古絵図には描かれている。

駿府城や丹波篠山城の古絵図によると、本丸の大手および搦手のそれ

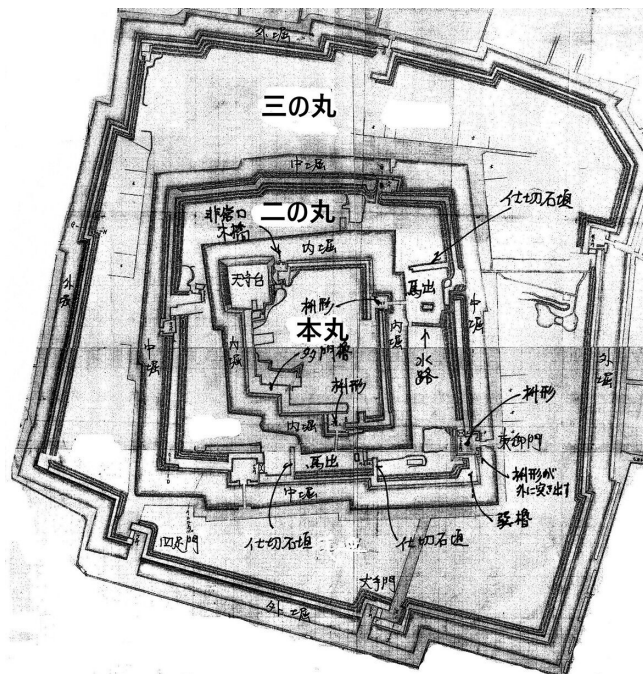


図5 駿府城の縄張

「日本城郭史資料 第16冊」駿府城絵図
(国立国会図書館デジタルコレクションより転載、部分、一部加工)

ぞれの虎口前において、内堀を渡る土橋を防護するために、土橋外で二の丸を低い石垣と土堀（駿府城では水路や土蔵も含む）で分断して、曲輪馬出（馬出というには大きすぎるものをいう）というべき小区画を設けていた。輪郭式の二の丸は奥行きが狭いので、この曲輪馬出は内堀から外堀（駿府城では中堀）までの間の敷地を占め、それによって二の丸は完全に分断されていた。すなわち二の丸はいくつかの区画（小曲輪）に分断されていたと言える。そして、そのやや緩やかな分断を嚴重な堀と高い石垣に変えたのが名古屋城における鵜の首を駆使した縄張である。

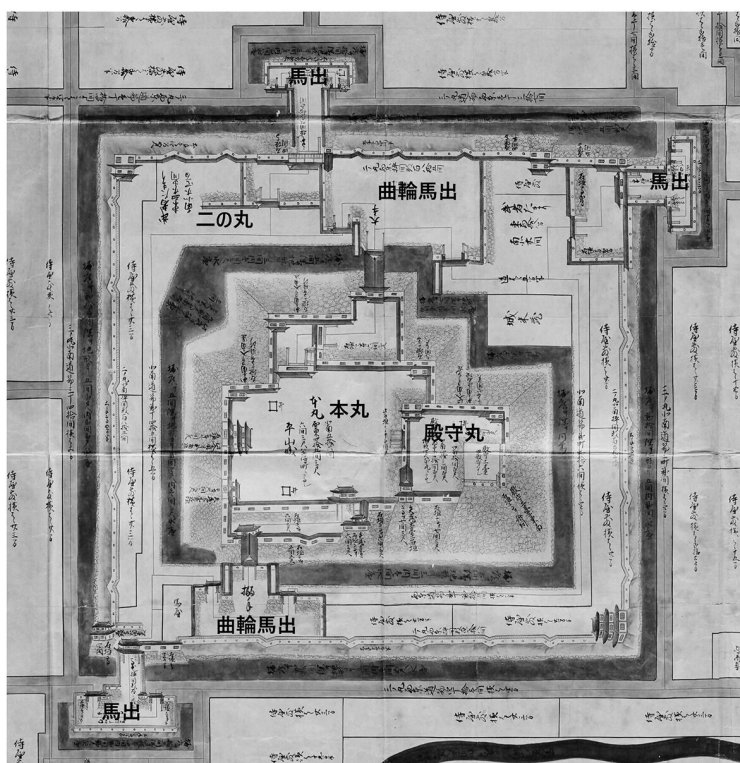


図6 丹波篠山城の縄張
「諸国城郭絵図 丹波篠山城之絵図」
(正保城絵図、国立公文書館蔵、部分、一部加工)

そこで、駿府城や丹波篠山城に先行して、家康の重臣の本多忠勝が慶長六年（一六〇一）に改修を始めた桑名城が注目される。桑名城の本丸はほぼ四角形であって、その周囲を二の丸・朝日丸・辻馬出・三の丸という小曲輪で取り巻いていた。それらの小曲輪どうしは堀で区画され、土橋や木橋で連絡していたが、それらを一連のものとして扱えば、名古屋城に類似した輪郭式縄張の発展型とも言える。

さらに慶長三年（一五九八）に家康の重臣の井伊直政が築いた高崎城

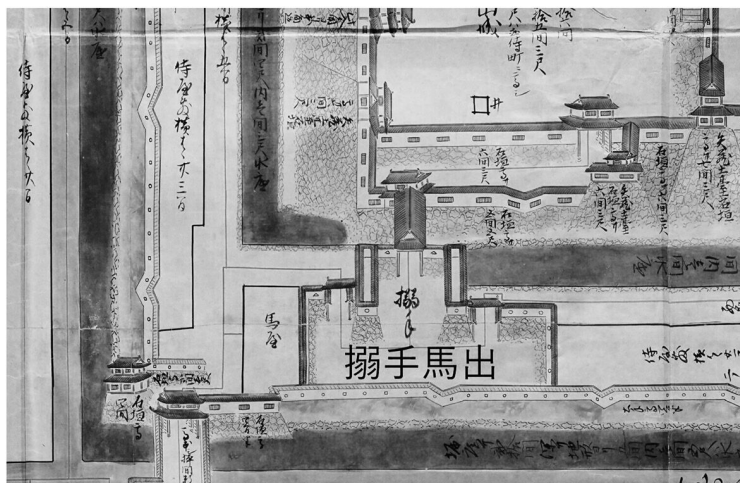


図7 丹波篠山城の曲輪馬出（搦手馬出）
「諸国城郭絵図 丹波篠山城之絵図」
(正保城絵図、国立公文書館蔵、部分、一部加工)

でも、ほぼ四角形の本丸を取り巻いて、梅木曲輪（角馬出）・二の丸・榎曲輪・西曲輪・西の丸といった小曲輪が設けられていた。これも輪郭式の変型と言える。

すなわち、名古屋城の巧妙な縄張は、譜代大名の井伊直政や本多忠政の慶長初期の築城で始まり、公儀普請の駿府城・丹波篠山城において飛躍的に発展したものを継承していると考えられる。輪郭式から最高度に進化発展したものだと言え、翻ってみれば輪郭式は徳川氏の縄張の

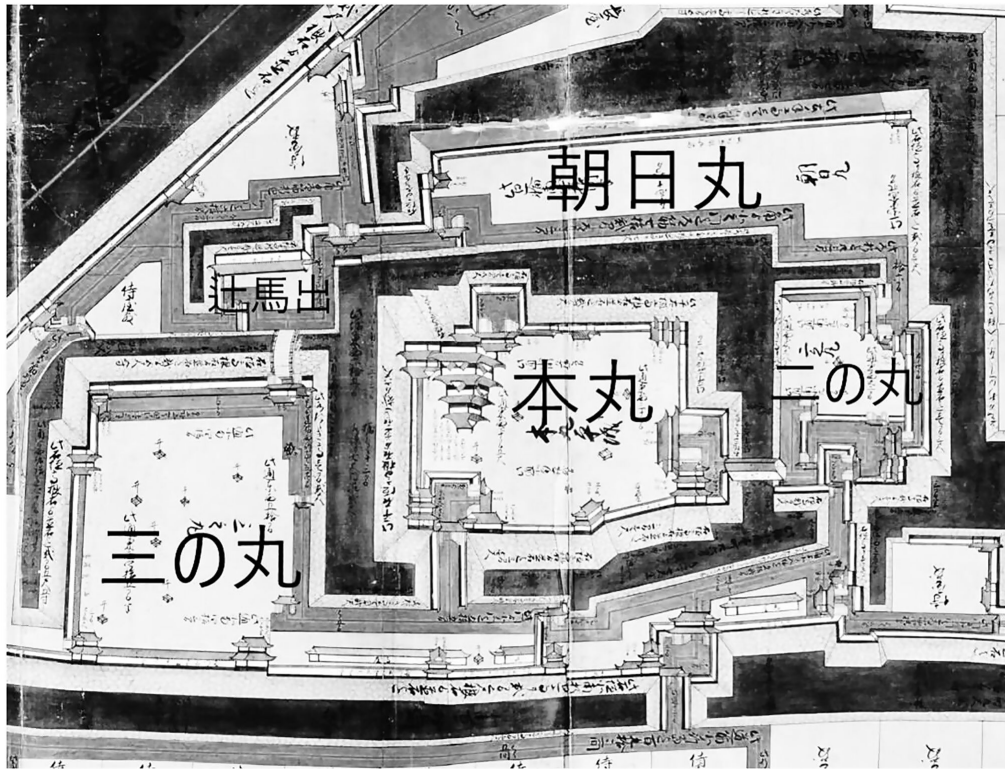


図8 桑名城の中心部の縄張
「諸国城郭絵図 勢州桑名城中之絵図」(正保城絵図、国立公文書館蔵、部分、一部加工)

基本形式だったとも言える。

しかし、名古屋城の輪郭式から進化発展したと言える縄張は、次に述べるように、その先行例からは完全に異質なもののへとさらに大きく変容していたと言わざるをえない。

三 名古屋城二之丸の特質

(一) 一般的な二の丸

一般的な近世城郭における二の丸には、大まかに二種類がある。その一つは、本丸に繋がる比較的大きな曲輪であって本丸に対して連郭式あるいは梯郭式に設けられるもの、もう一つは本丸を輪郭式に取り巻くものである。輪郭式の二の丸は前述したような欠陥があった。それに対して連郭式あるいは梯郭式に連なる二の丸は、本丸と同等の大きさの例が多く、あるいは本丸より大きい例も少なくない。本丸より大きい例は、高知城・高松城・岡崎城・吉田城(豊橋市)・浜松城・上田城・水戸城などが代表的である。

一般的に二の丸は本丸を守るために存在するので、本丸より防備性能が低く、また本丸よりも格式が低い。防備性能に関しては、城壁の高さが低い、本丸が石垣であっても二の丸は土居にする、堀幅が狭い、櫓が少ないか貧弱である、虎口の防備性能が下がるといったような差異をつける。また、御殿は慶長の築城期には本丸に設けられたが、年代が十七世紀中期以後に下降すると御殿機能の多様化や使用目的の変化によって手狭になり、広い二の丸へ新たに広大な御殿を建てて移転する傾向が強い。

(二) 名古屋城二之丸の特異性

名古屋城二之丸の特異性は、まずその広大さにある。次に国土地理院地図の計測機能を用いて得られた名古屋城の曲輪の面積を示す。

・本丸	二六、〇七〇	平方メートル
・西之丸・大手馬出・搦手馬出・塩蔵構・御深井丸		
合計	八四、二四〇	平方メートル
・二之丸	一〇〇、四〇〇	平方メートル

すなわち二之丸は本丸の約三・八倍もの面積があり、本丸周囲の他の五曲輪の合計の約一・二倍もある。二之丸を除いた本丸と他の五曲輪の合計は、二之丸の一・一倍にも足りないのである。すなわち名古屋城の中心部（総石垣で築かれた部分であって、二十家の外様大名に公儀普請で築かせた部分）のおよそ半分の面積を二之丸が占めている。城の中心部の半分が二の丸であるような偏った縄張の例は稀有である。

次に名古屋城二之丸は、その防備の嚴重さが注目される。名古屋城の中心部の主要な五つの虎口は、総て嚴重な枡形門である。大型の枡形を総石垣で築き、外側に高麗門、内側に櫓門を建てていた。さらに枡形の正面を除く三方は、櫓門の渡櫓と多門櫓で完全に囲まれており、そのような嚴重例は金沢城の石川門しか現存しない。城郭史上でも最堅固な構造であって、將軍本拠の江戸城ですら枡形門の枡形を囲う多門櫓は二の丸下乗門にしかなかった。

そのような嚴重な虎口は、本丸の大手門（南門）と搦手門（東門）および名古屋城の正門というべき西之丸榎多門には応用されてもしかるべきであるが、二之丸の大手門（西鉄門）と搦手門（東鉄門）にも応用されていた。外部から二之丸へ直接に至る虎口はこの二門しかなく、二之

丸虎口の嚴重さは異様である。

また、隅櫓の配置についても、二之丸には四棟の二重櫓があり、内向きである本丸側の北西隅を除いて嚴重に守備されていた。二之丸以外の五曲輪の隅櫓は合わせて四棟（西北隅櫓のみ現存）しかない。本丸のほぼ全周は多門櫓が圍繞していたが、他の部位では名古屋城の正面を守る西之丸南正面と大手馬出正面にも長大な多門櫓が築かれていた。二之丸では、その西正面の西鉄門左右に多門櫓が連なり、搦手の東鉄門の一部にも多門櫓が続いていた。他城における二の丸の防備と比べると、破格に嚴重だったことが注目される。

そのような嚴重な二之丸の曲輪内に尾張国主徳川義直の付家老を命じられた平岩親吉の屋敷が築城時にあったことは、諸記録からして周知の事実である。しかし、二之丸の破格の広大さと嚴重さからすれば、付家老の屋敷がその中心を占めていたことについて、強い違和感を覚えずにはいられない。

(三) 二之丸の四脚唐門の存在

名古屋城の普請中には、家康は時折立ち寄って視察しているが、その際の家康の仮の御座所（行殿、仮御殿）は二之丸の平岩親吉の屋敷に設けられたと言われてきた。その具体的な場所については知られていなかったが、今和泉報告によれば、平岩親吉の屋敷とは別の建物があったとする。

今和泉報告で特に注目したい点は、二之丸御殿の西南にあった孔雀門の建築年代が初めて明らかになったことである。名古屋城天守の御大工頭だった中井正清へ宛てた慶長十八年（一六一三）の書状によって、二之丸の四棟の隅櫓と二か所の枡形門および「唐門」がその年に竣工した

であろうことが明らかにされた。その前年の元日に平岩親吉は名古屋城二之丸で死去しているので、この唐門は平岩親吉の屋敷の門ではなく、その後も二之丸を御座所とした家康の行殿のために新たに建てられた門だったことが明らかになった。そしてこの「唐門」が明治初期に破却されるまで二之丸御殿にあった孔雀門であろうというのである。

まず、『金城温古録』に所載の孔雀門を解説する。同書には「孔雀御門」と記され、四脚御唐門造とあるように、切妻造の四脚門（四足門）の正面に唐破風を付けた唐門であって、記述によると銅瓦葺であった。扉の孔雀をはじめ数多くの彫刻と金具で飾られた豪華な唐門である。二本の円柱を主柱として、その前後に角柱の控柱を添えた正規の四脚門であった。

正規の四脚門は、平安時代後期においては大臣以上の官職の屋敷でないと建てるのが許されない最高格式の門であった。鎌倉時代以降になると、有力な社寺の表門にも広く応用されたが、世俗の屋敷の門としては江戸時代になっても官職の規定は厳重に守られていた。城郭にあった四脚門については、伏見城や聚楽第遺構という伝承のある社寺の門（豊国神社唐門や西本願寺唐門など）は、その伝承に信憑性がないが、現状が社寺の門なので官職規定は当てはまらないのでここでは無視する。すると、二条城二の丸御殿の正門である唐門が現存唯一の四脚門の例であって、江戸城や徳川大坂城にも存在しなかったものである。それが名古屋城二之丸御殿の門として江戸時代を通じて存在していたことは、名古屋城二之丸の特殊性を理解する上で極めて重要なことである。

『金城温古録』によると、この孔雀門には、「慶長年中、ここに神君御行殿の御所おはしませし時の御門也と云。或は寛永御上洛の御時、公方

様御本丸より此御城へ御成の節、御設の御成門なりとも云」という伝えがあるとする。この伝承について、家康の行殿の門であるという伝えが正しかったことが、今回確認された。家康は將軍に任じられたので、四脚門を建築する特権を得たのではあるが、行殿にもかかわらず最高格式の四脚門を建てたのは、名古屋城二之丸に特別な意義をもたせるためだったはずである。大名衆が名古屋城に集結した場合において、四脚門の存在によって徳川將軍家の絶対的権威を示す意図があったと想像される。

名古屋城二之丸の最終的な権威付けが四脚門（四脚唐門）の創建だったと考ええると、その二之丸自体の構造にも將軍邸の最高格式をもたせていたと捉えることも可能となる。名古屋城二之丸の正門が西鉄門であり、

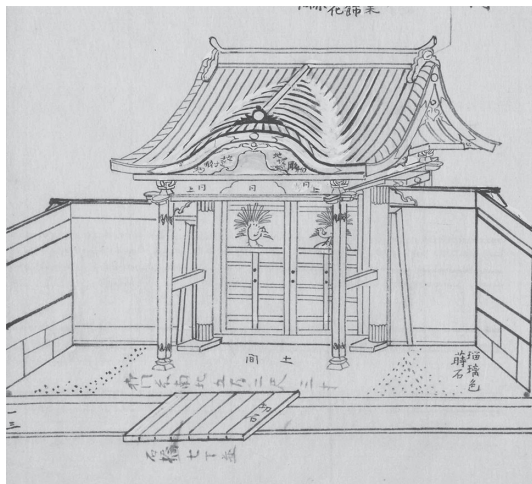


図9 二之丸孔雀門
「金城温古録」(名古屋市蓬左文庫蔵、部分)

裏門が東鉄門であることは多門櫓の配置からも明らかである。しかし、二之丸の正門が他城で好まれた南に向かない点には、意味があるかもしれない。足利將軍邸の室町殿には、西門と東門があつて、南には正規の門がなかったからである。しかも西門の方が格式が高く、東門は低かつた。名古屋城二之丸の城門配置についても、足利將軍家の權威を正當に受け継いでいると言えるのである。

おわりに

名古屋城の二之丸は、一〇万平方メートルを超え、家康側近の五千の軍勢を悠々と収容できる規模である。三之丸を含めた一一六万平方メートルの名古屋城の規模は、徳川本軍五万の人員を収容できた。大坂城包圍網を形成する他の公儀普請の城とは懸け離れて規模が大きい理由は、家康本人が出陣するための特別な築城だったからとすれば納得できる。

二之丸が破格に大規模な点は、慶長十五年の名古屋築城当初から家康の大坂への出陣を想定したものだつたと考えられる。さらに二之丸は、差し迫った大坂城攻めの際に家康が出陣するための本陣（行殿）として、平岩親吉の死後、慶長十八年までに隅櫓・枳形門そして唐門を急遽整備して、その威容を最高度に増したものと理解される。

家康が豊臣氏を正當に討伐するため將軍家（当時は大御所）の威嚴をもつて出陣する目的で、その二之丸は破格に大規模であり、異様に厳重に計画された。そして武家の棟梁として最高格式の四脚唐門を大坂の陣の前年までに設えて、出陣の最終的準備としたものと想像される。

もちろん、それには史料的な裏付けがなくいわば想像に過ぎないが、大坂城包圍網とされている公儀普請の城郭のなかで突出した規模と堅固

さ、さらに今和泉報告で明らかにされた四脚唐門の建築年代の決定によつて、名古屋城二之丸には大坂城を攻めるための戦略的かつ実戦的な目的があつたことがある程度は明白になったと思う。

そして、堀内報告によつて、二之丸の北御庭の築造年代が大坂落城後だったことが初めて確定した。名古屋城二之丸の軍事的なあるいは權威的な強大さに注目すると、その反面、城内庭園で最大級の平和的な二之丸庭園の存在が矛盾することになる。しかし、豊臣討伐という名古屋城二之丸の当初目的が達成された後は、名古屋城主の住居として再整備され、それに伴つて二之丸庭園が造られたとすれば、名古屋城草創期の歴史がやつと解明されたことになる。

また、付言するなら、義直の本丸から二之丸への移徙は本丸を公儀の宿館として明け渡したものとという従来の見解については、そのまま素直に受け入れるべきではないかもしれない。四脚唐門である孔雀門が存在する二之丸の家康の行殿に居を移すことは、武家の棟梁の象徴を家康から暗黙の上で受け継ぐことに見えるからである。

註

（１）大類伸『城郭之研究』日本学術普及会、一九三八年三月。

（２）名古屋城の大手馬出・搦手馬出は、長方形平面の角馬出である。両者ともに本丸の虎口から土橋で内堀を渡つたところに位置し、そこから本丸の城壁沿いに左右に土橋を設けて出撃する形式で、典型的な馬出である。ただし、馬出としては通常のものの数倍もの規模があるので、馬出を拡大した「曲輪馬出（郭馬出）」という新式の構えである。その先駆例は後述する駿府城や丹波篠山城の二之丸にあつた。

（３）駿府城天守台は、その中央の平地に天守がほぼ独立して建ち、その四周に隅櫓や多門櫓を建てていたので、正しくは天守曲輪（天守丸とも）というべきものである。これ

を天守台と呼んでいるのは、天守の焼失後の絵図に天守台と記されているからで、天守が残っていたら天守台とは呼ばれなかったはずである。また、その天守台の正面にある突出部は、名古屋城の小天守台の原型となったものであるが、小天守は建てられず、小さなL字形平面の多門櫓があった。したがって小天守台ではなく、天守曲輪の一部としたほうがよい。

- (4) 丹波篠山城では、後世になって曲輪の呼称が変更されており、往時の天守丸（史料上は「殿守丸」）を本丸、往時の本丸を二の丸、往時の二の丸を三の丸と現在では呼んでいる。本報告では慶長築城当時の二の丸を扱うので、現在の呼称ではなく、往時の呼称に従う。

- (5) 本丸御殿から新設二の丸（あるいは三の丸）御殿への城主の移徙の例を挙げると、熊本城・高知城・岡山城（本丸上段から中段へ）・松江城・姫路城・丹波亀山城・浜松城・仙台城などがある。

既発表文献

- ・「津城と高虎の城造り」『藤堂高虎―その生涯と津の町の発展―』津市教育委員会、二〇〇八年八月

- ・『復元大系日本の城』六中国、ぎょうせい、一九九二年三月（共著）
- ・『復元大系日本の城』五近畿、ぎょうせい、一九九二年五月（共著）
- ・『復元大系日本の城』四東海、ぎょうせい、一九九二年七月（共著）
- ・『復元大系日本の城』七南紀・四国、ぎょうせい、一九九三年五月（共著）
- ・『復元大系日本の城』九城郭の歴史と構成、ぎょうせい、一九九三年八月（共著）
- ・『日本の城原風景』新人物往来社、一九九四年二月（共著）
- ・『名古屋城』歴史群像名城シリーズ、学習研究社、一九九五年一月（共著）
- ・『秀吉の城と戦略』成美堂出版、一九九八年四月（共著）
- ・『城の鑑賞基礎知識』至文堂、一九九九年九月
- ・『最新日本名城古写真集成』新人物往来社、二〇〇二年五月（監修・執筆）
- ・『よみがえる名古屋城』学習研究社、二〇〇六年一月（監修・執筆）
- ・『城造りのすべて』学習研究社、二〇〇六年二月（監修・執筆）

- ・『すぐわかる日本の城』東京美術、二〇〇九年一〇月（監修・執筆）
- ・『城のつくり方図典』改定新版、小学館、二〇一六年三月（初版は二〇〇五年三月）
- ・近世城郭の最高峰 名古屋城』名古屋城検定実行委員会、二〇一九年三月（監修・執筆）
- ・『図説近世城郭の作事 天守編』原書房、二〇二二年一月
- ・『図説近世城郭の作事 櫓・城門編』原書房、二〇二三年五月
- ・『天守 芸術建築の本質と歴史』吉川弘文館、二〇二二年十一月
- ・『図説近世城郭の普請 石垣編』原書房、二〇二四年四月